第５節　災害の想定

第１項　既往災害の事例

１．　既往災害事例【資料編*1　参照】

昭和 30 年代後半からの治山治水事業対策の進展、基本法による防災体制の充実、気象観測施設の整備、情報伝達手段の発達や普及等により、昭和 28 年の大水害以後は全般的に大規模な被害は減少している。しかし、平成 15 年７月の福岡県内の災害をはじめ、平成 21 年７月の豪雨、平成 22 年７月の大雨等による中小河川の損壊、溢水、住家の床上及び床下浸水や崖崩れ等、大雨が降れば何らかの災害が発生している。

【 風水害 】

本市において過去に発生した災害は、集中豪雨や台風による浸水害あるいは土砂災害が殆どであり、過去の主な災害事例や福岡県内で発生した災害事例を列挙すると、表 1.5.1 風水害履歴一覧の事例に示す通りである。

1）平成３年９月 12 日～９月 15 日	（台風第 17 号）
2）平成３年９月 25 日～９月 28 日	（台風第 19 号）
3）平成７年６月 30 日～７月６日	（梅雨前線）
4）平成９年７月７日～７月 13 日	（梅雨前線）
5）平成 11 年６月 22 日～７月 13 日	（梅雨前線）
6）平成 13 年７月 11 日～７月 13 日	（梅雨前線）
7）平成 15 年７月 18 日～７月 21 日	（梅雨前線）
8）平成 16 年９月７日	（台風第 18 号）
9）平成 18 年９月 17 日	（台風第 13 号）
10）平成 20 年８月４日	（大雨）
11）平成 21 年７月 24 日～８月６日	（豪雨）
12）平成 22 年７月 11 日～７月 16 日	（大雨）
13）平成 26 年８月 21 日～８月 22 日	（豪雨）
14）平成 30 年７月５日～７月８日	（豪雨）
15）令和２年９月６日	（台風 10 号）
16）令和３年８月 12 日～８月 19 日	（豪雨）
17）令和４年９月 18 日～９月 19 日	（台風 14 号）

既往風水害の事例に示すように、昭和 28 年以後の風水害事例をみると、本市では台風による人的・住家被害は少なく、大雨による被害が多いのが特徴的であり、豪雨時の鉄砲水による土砂災害等が引き起こされた事例もある。

これらの土砂災害や河川の氾濫・浸水害等の災害と降雨の間には密接な関係にあり、大雨が降れば何らかの災害が発生している。また、一様な強さでしかも断続的な雨よりも、集中的に降る大雨の場合の方が多く発生し、被害も大きくなるようである。

災害を未然に防ぐためには災害危険箇所の点検や対策等の検討も必要であるが、このような風災害（特に前線による大雨）について気象現象の特徴を整理するとともに、今後の気象情報の収集（雨の降り方、特に時間雨量や日雨量）及び伝達を的確に把握できる体制の整備に努め、防災活動の基礎とすることも重要である。

大雨：大雨注意報基準以上の雨

豪雨：1 時間又は 3 時間の少なくとも一方が大雨警報基準を超え、かつ 24 時間の警報基準を超える大雨

*1 ● 資料 1.5.1「個別気象概要」

◆近年における災害種別（詳細）

（市災害関連報告等による集計）

NO	名称		H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	数量（件）
1	人的被害（死者）					1				1
2	住家被害	全壊流出								
3		半壊			2					2
4		一部破損			23					24
5		床上浸水			20					20
6		床下浸水			47					47
7	その他	崖崩れ	2	1	293	3	2	35		336
8		道路	1		70	8		17		96
9		河川	2		55	3	1	24		85
10		橋梁								
11		鉄道								
12		公共施設				1				2
	計		2	5	1	511	15	3	0	613

その他：空欄・原因不明等

【 火　災 】【資料編*2　参照】

本市において過去10年の出火状況を整理してみると、過去10年間（H25～R4）で414件、内建物火災209件で全体の50%を占めている。平均件数は41.4件と推移している。

《 近年における火災発生件数 》

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	合計	平均
建物出火	23	21	23	31	18	24	21	15	23	10	209	20.9
林野出火	0	1	0	0	3	0	0	3	0	2	9	0.9
車両出火	10	11	5	9	5	4	5	5	3	2	59	5.9
その他の出火	10	7	11	9	23	18	18	17	9	15	137	13.7
出火件数　計	43	40	39	49	49	46	44	40	35	29	414	41.4
死者	2	2	1	5	2	0	1	0	1	0	14	1.4
負傷者	4	7	8	13	1	5	3	4	5	4	54	5.4

筑紫野太宰府消防組合消防本部　警防課資料　R4

*2 ● 資料 1.5.2「火災危険区域図」

表1.5.1「風水害履歴一覧」

番号	災害発生年月日	原因	降雨量 観測所			被害状況																			備考
						人的			住家被害					その他（箇所、戸、回線）										耕地（ha）		
			最大時間雨量	最大日雨量	総雨量	死者（行方不明）	重傷者	軽症者	全壊流出	半壊	一部破損	床上浸水	床下浸水	崖崩れ	道路	河川	橋梁	鉄道	公共施設	水道	電話	電気	流出埋没	冠水	
			(mm)	(mm)	(mm)				(戸)	(戸)								(m)							
1	H3.9.12～9.15	台風第17号	44.0 前原	83.0 福岡				3			35														筑紫野市における被害
2	H3.9.25～9.28	台風第19号	53.5 福岡	97.5 福岡				8			59														筑紫野市における被害
3	H7.6.30～7.6	梅雨前線												7	41	27							0.2		筑紫野市 太宰府市
4	H9.7.6～7.13	梅雨前線											1	4	1	1			1						筑紫野市 太宰府市
5	H11.6.22～7.3	梅雨前線											23												
6	H13.7.11～7.12	梅雨前線											2	3		1									
7	H15.7.18～7.19	梅雨前線	58.0	198.0	361.0 太宰府							56	21	70	27	33				1					
8	H16.9.7	台風第18号	26.5	61.5	85.0 福岡						13					27									筑紫野市
9	H18.9.17	台風第13号											2	2	5										筑紫野市
10	H20.8.4	大雨														1									筑紫野市
11	H21.7.24	豪雨				1			1	1	3	37	57	134	80	131					7,000				筑紫野市
12	H22.7.11～7.16	大雨									1	1	20	108	47	57									筑紫野市
13	H26.8.21～8.22	大雨	98.5 太宰府									36	60	50	20	19									筑紫野市
14	H30.7.5～7.8	豪雨	70.0 原田		518.0 原田	1				2		24	47	294	114	100									筑紫野市
15	R2.9.6	台風																							最大気圧920hPa 避難者数649人 （過去最大）
16	R3.8.12～8.19	豪雨	29.0 太宰府		807.5 太宰府									19	27	19									筑紫野市
17	R4.9.18～9.19	台風	11.5 太宰府		135.0 太宰府																				最大気圧910hPa

【 地 震 災 害 】

（１）　地震の履歴

日本海側に位置する福岡県下で発生する地震は、活断層などの断層帯の直下で起きている。歴史を遡ってみると、福岡県ではいくつかの大きな地震が発生しているが、日本のほかの地域と比べると地震の少ない地域であると言われてきた。福岡県西方沖地震以前に起きたマグニチュード 6.0 を超える大地震は糸島地震（1898 年）であり、今回の福岡県西方沖地震は約 100 年ぶりの大地震であった。

福岡県及び近辺地域においては過去、以下のような被害地震の履歴が記録されている。

◆福岡県の大規模地震発生の概要

年代	名称・地域	震源規模	県及び周辺地域の主な被害等
679年12月	**筑　紫**	M6.5-7.5	家屋崩壊多数
1700年 4月15日	壱岐・対馬地震	M7.0	壱岐において家屋全壊89
1706年11月26日	**筑　後**	不明	
1730年 3月12日	対　馬	不明	
1831年11月14日	肥　前	M 6.1	
1848年 1月10日	**筑　後**	M 5.9	柳川で家屋倒壊
1872[明治 5]年 3月14日	浜田地震	M 7.1	久留米付近で液状化
1898[明治31]年 8月10日	**糸島地震**	M 6.0	負傷者3、家屋全壊7
1898[明治31]年 8月12日	**糸島地震**	M 5.8	
1929[昭和 4]年 8月 8日	**福岡県南部**	M 5.1	家屋半壊1
1930[昭和 5]年 2月 5日	**福岡市西部**	M 5.0	小崖崩れ
1941[昭和16]年11月19日	日　向　灘	M 7.2	
1968[昭和43]年 8月 6日	豊後水道	M 6.6	
1991[平成 3]年10月28日	周　防　灘	M 6.0	
1996[平成 8]年10月19日	日　向　灘	M 6.9	
1997[平成 9]年 6月25日	山口県北部	M 6.6	
2005[平成17]年 3月20日	**福岡県西方沖**	M 7.0	死者1、負傷者1,186 家屋全壊143、半壊352 一部損壊9,190
2005[平成17]年 4月20日	**福岡県西方沖** (余震)	M 5.8	負傷者58、家屋一部破損5等

（参照資料：「新編　日本被害地震総覧（1987）」、「福岡管区気象台資料（1926 年以降の記録）」）

福岡県周辺では過去 100 年程度をみると、糸島地震のほかには福岡県西方沖地震の前にほとんど規模の大きな地震は発生していない。また、最近 20 年におけるマグニチュード 1.0 以上の地震をみても福岡県周辺は日本のほかの地域と比較して地震の発生が少ない地域であるといえる。

九州地方ならびに福岡県周辺で発生している地震の震源分布を図 1.5.1 に示す。

*福岡県西方沖地震

平成 17 年３月 20 日に発生した福岡県西方沖地震では、福岡市中央区、福岡市東区、前原市、佐賀県みやき町で震度６弱を観測した。また筑紫野市では震度４弱を観測した。

福岡管区気象台によると、発震機構は圧力軸を東北東－西南西方向に持つ、北西－南東方向にほぼ鉛直な断層面を有する左横ずれ断層であった。

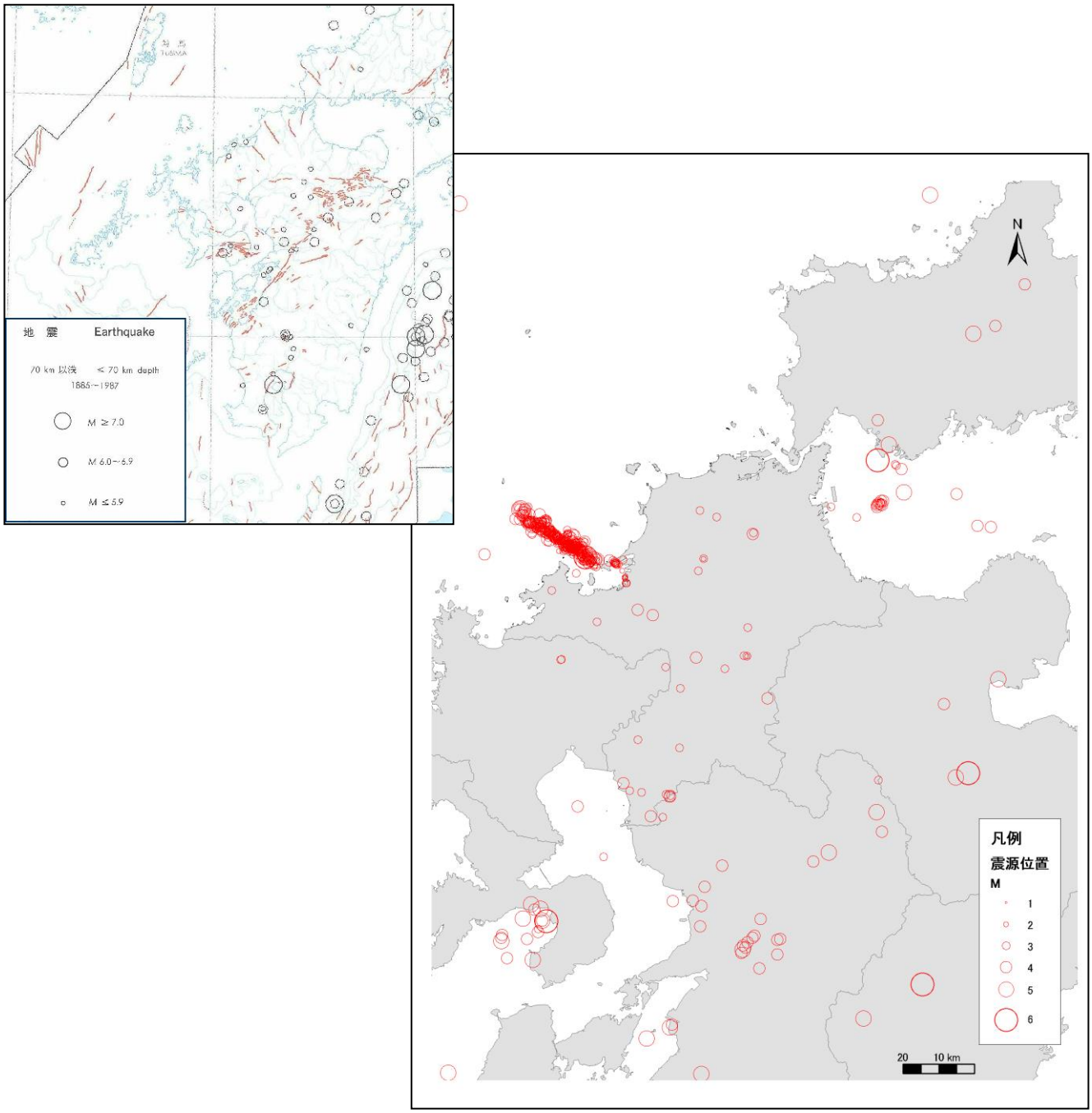


図 1.5.1　福岡県近傍で発生した地震の分布状況

上図：「新編日本の活断層」（1991）から（1885－1987 年に発生した規模の大きな地震）
下図：（気象庁「震度データベース」より作成。過去 20 年間に福岡県内で震度１以上を観測した地震）

（２）　地震と活断層との関連

活断層とは、第四紀（200 万年前から現在まで）に繰り返し活動し、今後も活動すると思われる断層のことである。この活断層がずれることによって地震が発生するが、一般に地殻上部(20 km 以浅)におけるマグニチュード 7.0 程度以上の地震の場合、その震源となった断層に沿った岩盤のずれは地表まで届き、地表地震断層として観察される。

地形・地質的な線状構造であるリニアメントや断層が、活断層のためのものであるかどうかの確実性については、「新編　日本の活断層（1991）」により以下のように区分される。

活断層の確実度

① 確実度Ⅰ....活断層であることが確実なもの
「活断層の位置や変位の向きがともに明確なもの」をいう。

② 確実度Ⅱ....活断層であると推定されるもの
「位置が明らかであり、変位の向きが推定できるもの」、確実度Ⅰと判定できるほど確定的な地形・地質的な証拠がない場合である。

③ 確実度Ⅲ....活断層の疑いのある地形・地質の分離線形のもの
「変位の向きが不明で、他の原因も考えられるような分離線形のもの」、下記に示す活動度Ｃ級以下の活断層である。

また、第四紀における活断層の活動の程度を活動度と呼ぶ。第四紀の基準地形や第四紀層の変位量を、形成時から現在までの年数で割った値を平均変位速度という。

この平均変位速度Ｓ（1,000 年間に平均化した変位速度：m）によって、Ａ・Ｂ・Ｃ級に分類されている。ここに示した活動度は、大地震の周期や今後の活動時期の推定のための重要な指標である。

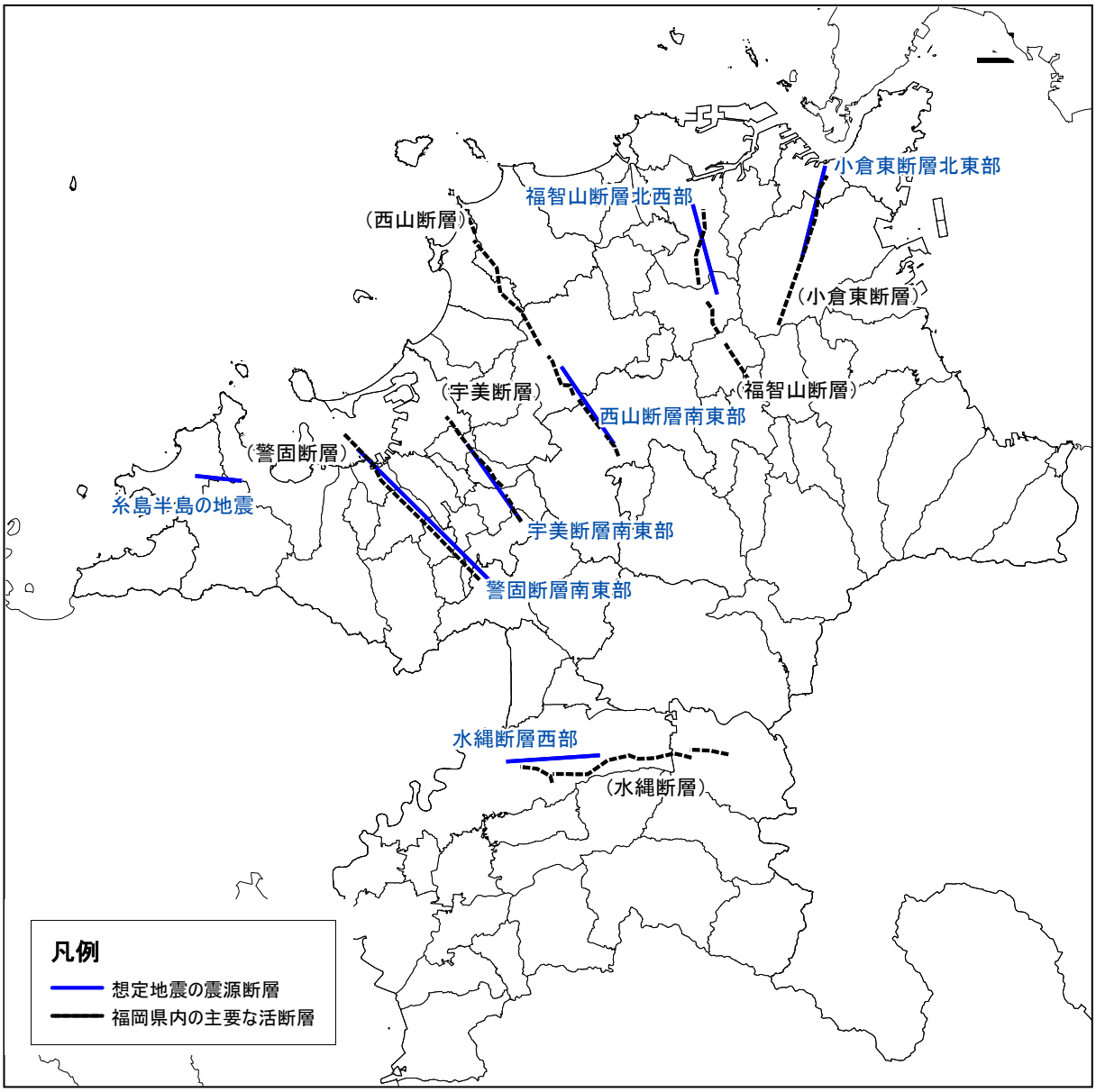
活動度（平均変位速度Ｓ）
① Ａ級：　10m＞Ｓ≧　1m（　1m／1,000年の単位）
② Ｂ級：　1m＞Ｓ≧ 0.1m（ 0.1m／1,000年の単位）
③ Ｃ級：　0.1m＞Ｓ≧0.01m（0.01m／1,000年の単位）

地震の活動度・周期等については、断層の正確な位置を把握したうえで、その活動年代及び周期を直接的に把握できるような調査が必要となる。地震災害という観点から考えた場合、数万年前単位での活動状況のみならず、特に千年・百年単位での活動状況が問題となる。内における主な活断層の活動度概要や分布を以下に示す。

◆　福岡県内における主な活断層

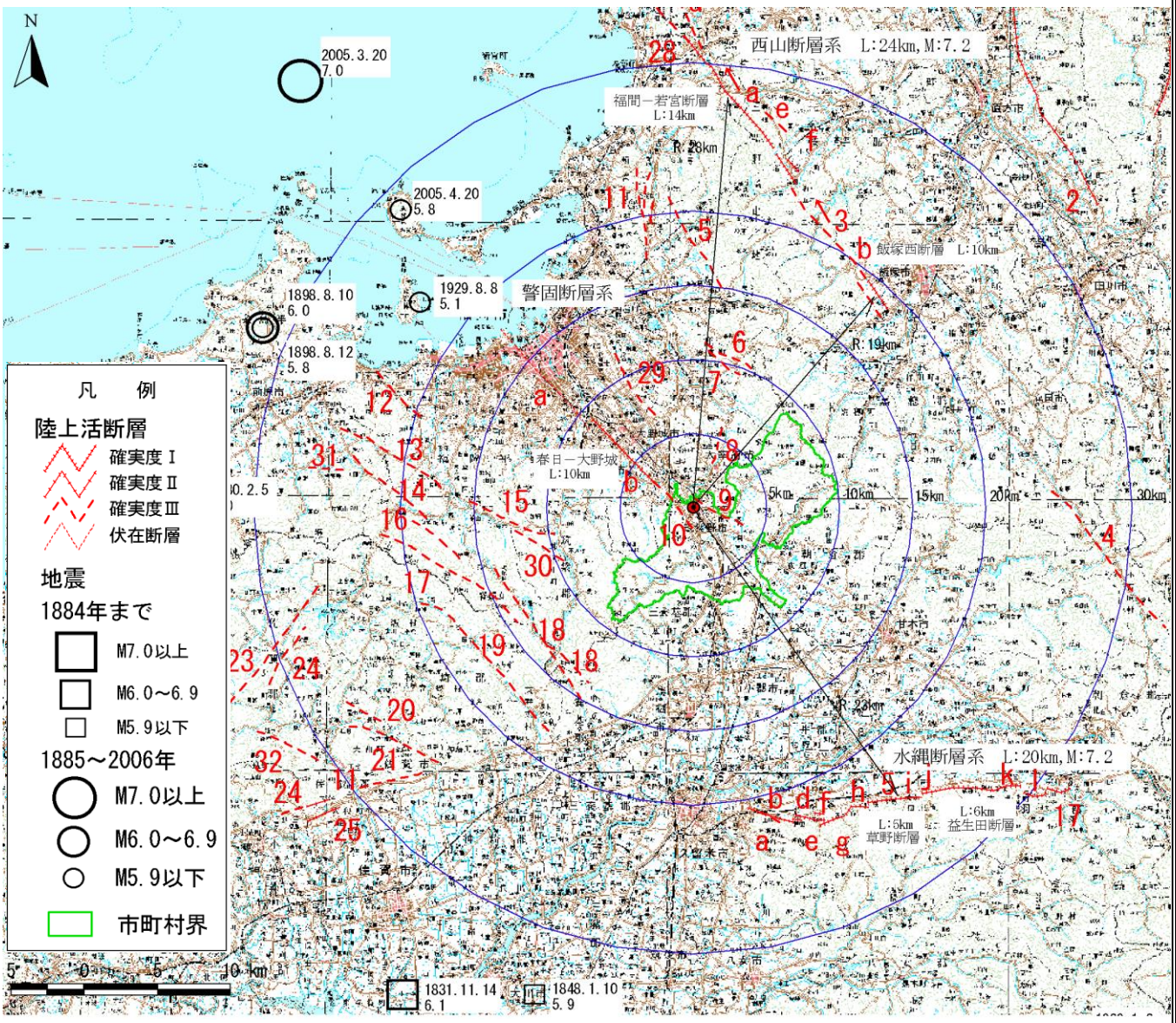
	断　層	確実度	活動度	長　さ	地　域
1	小倉東断層	確実度Ⅰ	Ｃ～Ｂ	約17km	北九州市
2	西山断層	確実度Ⅰ	＜Ｃ	約31km	飯塚市、宗像市
3	警固断層	確実度Ⅰ	Ｃ	20km以上	福岡市
4	水縄断層	確実度Ⅰ	Ｂ	約26km	久留米市
5	福智山断層	確実度Ⅰ	Ｂ～Ｃ	約20km	北九州市
6	宇美断層	確実度Ⅰ	Ｃ	約14km	福岡市－太宰府市

「新編　日本の活断層（1991）」、「福岡県による評価（平成 18 年 12 月時点）」をもとに加筆修正



● 図 1.5.2　福岡県想定地震の震源断層分布図

警固北西部



● 図 1.5.3「主な活断層の分布と筑紫野市からの距離」（新編日本の活断層）

● 表1.5.2「被害地震履歴一覧」

番号	発生年月日時刻	名称	震源地	規模(M)	震源までの深さ(km)	震央付近の最大震度	福岡(気象台)における震度	種別	前震の有無	余震の有無	被害概要
1	679. 夜	筑紫の大地震	筑紫（?）	6.5～7.5	?	不明	不明	内陸型			家屋倒壊、地割れ。
2	1596.9.4 申の刻		豊後	7	?	不明	不明	内陸型	有		7月3日から地震．高崎山崩れ、湯布院で山崩れ。 （瓜生島80%陥没?、死者708人）
3	1625.7.21 夜		熊本	5.0～6.0	?	不明	不明	内陸型			熊本城の火薬庫爆発、死者50人。
4	1698.10.24 未の下刻		大分	6	?	不明	不明	内陸型			大分城の石垣崩れ、岡城破損．佐賀有感1日に6回。
5	1700.4.15		壱岐・対馬	7	?	強	不明	内陸型	有	有	家屋・石垣崩れる、対馬・壱岐で強震にて被害、 佐賀・平戸瓦落ちる。
6	1703.6.22		小城	不明	?	不明	不明	内陸型			小城古湯温泉の城山崩れ、久留米有感。
7	1703.12.31 丑の刻		湯布院・庄内	6.5±1/4	?	不明	不明	内陸型			家屋破損、石垣崩れ、地割れ、死者1名。大分 府内被害無し。
8	1705.5.24 丑の刻		阿蘇付近	不明	?	不明	不明	内陸型			阿蘇で坊大破、岡城石垣崩れ。 熊本城中被害無し。
9	1706.11.26 夜		筑後	不明	?	不明	不明	内陸型		有	久留米、柳川で揺れ．堀の水ゆり上げ魚死。 ７回地震有り．
10	1723.12.18 朝五ツ		肥後・豊後 ・筑後	6.5±1/4	?	V	不明	内陸型			肥後で倒家980戸､死者2人､負傷者25人、玉名 で地割れ噴水、柳川強く感じる。
11	1792.5.21 酉の刻過		雲仙岳	6.4	?	V～VI	不明	内陸型			地割れ、潰家、死者2人、眉山崩壊。
12	1831.11.14 丑の刻		肥前	6.1	?	不明	不明	内陸型			佐賀城の石垣崩れ、潰家有り。
13	1848.1.10		筑後	5.9	?	不明	不明	内陸型			柳川で家屋倒壊あり。
14	1854.12.26 朝四ツ		伊予西部	7.3～7.5	?	VI	不明	海洋型			豊後・小倉で家々潰れる．鶴崎で倒れ屋敷100戸。
15	1872.3.14 17時頃	浜田地震	石見・出雲	7.1	?	VI	不明	海洋型	有		久留米で液状化による被害。
16	1889.7.28 23:45		熊本付近	6.3	?	V～VI	強　筑後	内陸型		有	熊本市付近で被害大．熊本市、飽田郡で死者20人、負傷者 74人。 山鹿･菊池で家屋倒壊．地割れ･石垣崩れ．熊本震度V。
17	1891.10.16 7:06		豊後水道	6.3	?	強	不明	内陸型			豊後東部で家屋壁亀裂、瓦落下、石垣潰れ。
18	1894.8.8 23:19		熊本県中部	6.3	?	強	強　筑後	内陸型		有	阿蘇郡で家屋土蔵の破損。 強肥後　筑後　豊後。
19	1895.8.27 22:42		熊本	6.3	?	強	不明	内陸型			阿蘇郡で土蔵破損、堤防亀裂、石垣崩壊。
20	1898.8.10 21:57		福岡市付近 （糸島半島）	6	?	強	強　福岡	内陸型		有	糸島半島で負傷3,家屋土蔵破壊．12日08:36(M5.8)にも余 震。この地震で福岡市で家屋土蔵の壁亀裂。
21	1899.11.25 3:43		日向灘	7.1	?	強	強　筑後	海洋型			宮崎市で家屋破損、瓦壁土落下。3:43 M7.1、3:55 M6.9。第 二の地震では大分で家屋土蔵破損．細島津波32cm。
22	1907.3.10 22:03		熊本県中部	5.4	?	不明	不明	内陸型	有		植木町で煙突破損、倉庫亀裂、山鹿町で微少被害。 Ⅳ熊本。
23	1911.8.22 7:48		阿蘇山付近	5.7	?	不明	不明	内陸型			阿蘇郡長陽村で石垣破損、山崩れ。
24	1916.3.6 18:12		大分県北部	6.1	?	不明	不明	内陸型			大野郡三重町で忠魂碑1倒れる。
25	1922.12.8 1:50		千々石湾	6.9	?	不明	不明	内陸型		有	北有馬で死者11人、住家全壊13戸、東有家で死者4人、島 原半島で地割れ、山崩れ。 長崎V。
26	1922.12.8 11:02		千々石湾	6.5	?	不明	不明	内陸型		有	小浜で被害．死者3人､家屋倒壊70戸。Ⅳ長崎。
27	1925.8.10 9:37		日田地方	4.4	?	不明	不明	内陸型	有	有	地面の亀裂、地下水異常。同月4～13日の間に21回の有感 地震。
28	1928.11.5 13:41		大分県西部	4.7	0	Ⅲ	Ⅰ　福岡	内陸型			北小国地方で小崖崩れ4箇所。
29	1929.1.2 1:40		福岡県南部	5.5	20	Ⅲ	Ⅰ　福岡	内陸型			小国地方で家屋半潰1戸、県道の亀裂･落石･崖崩れ。石灯 籠・墓石の転倒有り。

番号	発生年月日時刻	名称	震源地	規模(M)	震源までの深さ(km)	震央付近の最大震度	福岡(気象台)における震度	種別	前震の有無	余震の有無	被害概要
30	1929.8.8 22:33		福岡県	5.1	0	Ⅲ	Ⅲ 福岡	内陸型			雷山付近．震央付近で壁亀裂崖崩れ等。
31	1930.2.5 22:28		福岡県西部	5	30	Ⅲ	Ⅲ 福岡	内陸型		有	雷山付近．小崖崩れ、地割れ（7日12:35強い余震）。
32	1933.4.8 20:54		熊本県中部	4.3	30	Ⅲ	Ⅰ 福岡	内陸型			緑川流域で崖崩れ有り。
33	1937.1.27 16:04		熊本付近	5.1	30	Ⅳ	Ⅱ 福岡	内陸型			上益城郡秋津村で長さ10間(18m)幅3尺(0.9m)の石橋が大音響とともに崩れ落ちた。
34	1941.11.19 1:46		日向灘	7.2	0	Ⅴ	Ⅲ 福岡	海洋型		有	延岡で石垣破損、道路亀裂、堤防破損、壁剥落、煙突倒れる。 人吉で死者1人､負傷者5人､住宅全壊6戸､半壊11戸、細島で津波1m。 Ⅴ宮崎、人吉　Ⅲ福岡、下関、萩。
35	1947.5.9 23:05		日田地方	5.5	0	Ⅲ	Ⅱ 福岡	内陸型		有	日田、三芳で壁亀裂・剥落、崖崩れ、道路破損、紡績転倒等の小被害。 余震数日続いた。
36	1966.11.12 21:01		有明海	5.5	20	Ⅲ	Ⅲ 福岡	内陸型			屋根瓦、壁崩れる。
37	1968.2.21 10:45	えびの地震	霧島山北麓	6.1	0	Ⅴ	Ⅲ 福岡	内陸型	有	有	死者3人､負傷者42人､住宅全壊368戸､道路損壊73箇所､山崩れ44箇所､鉄道被害6箇所。 1967年11月17日から地震発生、2/21,2/22,3/25(2回)震度Ⅴ（震央付近)。」 京町では全壊率50%。
38	1968.8.6 10:17		愛媛県西方沖	6.6	40	Ⅴ	Ⅳ 福岡	海洋型			大分で家屋全焼1戸、道路損壊、山崩れ（愛媛で負傷者15人)。 愛媛県を中心に被害。宇和島で重油タンクのパイプ折損し、海上流出。
39	1972.9.6 20:42		有明海	5.2	10	Ⅲ	Ⅱ 福岡	海洋型			清水、坪井、京町、池田町で停電（25,000戸)。
40	1975.1.23 23:19		阿蘇山北縁	6.1	0	Ⅴ	Ⅲ 福岡	内陸型		有	熊本県負傷者10人、建物被害、道路損壊、山崩れ、大分県建物被害、山崩れ。 （震央付近震度Ⅴ　22日にもほぼ同じ場所でM5.5の地震あり)。 Ⅴ阿蘇山　Ⅳ熊本　Ⅲ大分　延岡　佐賀　福岡。
41	1975.4.21 2:35		大分県中部	6.4	0	Ⅳ	Ⅲ 福岡	内陸型		有	大分県重軽傷者22人、住家全壊58戸、道路被害128箇所、鉄道被害28箇所。 家屋被害率100%地区あり．震央付近で発光現象（ﾚｰｸｻｲﾄﾞﾎﾃﾙ1F潰れる)。 Ⅳ大分　阿蘇山　Ⅲ延岡　福岡。
42	1984.8.6 17:30		島原半島西部	5.7	7	Ⅴ	Ⅱ 福岡	内陸型		有	群発地震．17時28分から24時までに197回の有感地震．最大震度はⅤ。 小浜町で家屋一部破損53戸、壁亀裂、石垣破損、墓石転倒有り。
43	1991.10.28 10:09		周防灘沖	6.0	19		Ⅳ 福岡	海洋型			文教施設若干の被害。
44	2005.3.20 10:53	福岡県西方沖	福岡県西方沖	7.0	9					有	６弱：福岡県 福岡市東区東浜,福岡市中央区舞鶴,前原市前原西,佐賀県 みやき町北茂安 被害：死者１名、負傷者1,186名 住家全壊143棟、住家半壊352棟など。 津波予報：気象庁は10:時57,福岡県日本海沿岸と壱岐・対馬に「津波注意」の津波注意報を発表した。12:00に津波注意報を解除した。

：福岡県内を震源とする被害地震

（強：Ⅳ～Ⅴ、烈：Ⅴ～Ⅵ）

資料；新編　被害地震総覧（東京大学出版会）

第２項　災害の想定

１．災害の想定

本市に発生する災害で、人命や家屋等の財産、公共施設、農林産物や農林業施設等に大きい影響を与える主要な災害としては、集中豪雨や台風等を誘因とする土砂災害や河川の氾濫等の風水害と、地震や火災あるいは本市を通る大交通網での交通事故等の予知できない災害とに大別できる。

毎年、梅雨時期や台風期に集中豪雨が頻繁に発生しているため、河川がはん濫し、住居や商店が浸水している。豪雨に伴い、地盤がゆるくなり、がけ崩れが起こるケースが多く、土砂災害もたびたび発生している。市ではこれまでに大きな地震災害は発生していないが、市域に警固断層がのびている。

したがって、本市の災害の想定にあたっては、地形・地質状況や過去の災害事例及び福岡県防災対策指針等を考慮し、次の災害を想定する。

（１）　風水害

風水害は、集中豪雨や台風等の気象現象を誘因として起きる災害が多く、本市における過去の災害事例を見ても例外ではない。風水害には、低地での浸水害や渓流での鉄砲水等による土石流や急傾斜地でののり面崩壊、山腹崩壊等がある。

1)　水害

福岡県において指定している、堤防高不足や河積断面不足により、堤内背後地への被害が予想される河川及び湖沼等、水防上重要となる箇所を想定する。また、過去の堤内背後地における浸水害事例や河川の改修状況あるいは流下能力、地形状況等を考慮して浸水地域を想定する。

2)　土砂災害

〈土石流災害〉

県で、渓床勾配や平均渓流幅及び延長等で指定している渓流を想定する。

〈急傾斜地崩壊〉

県で指定している急傾斜地崩壊危険箇所や急傾斜地崩壊危険区域及び本市で指定している急傾斜地崩壊危険箇所を想定する。

〈地すべり崩壊災害〉

地すべりは、梅雨期や台風期の降雨によって動きが活発になる場合もある。

造成地における地すべり災害も発生していることから、地すべり崩壊による住宅、道路等への被害を想定する。

〈道路災害〉

福岡県の指定する落石、崩壊等の災害を想定する。

（２）　火災及び危険物災害

筑紫野太宰府消防本部で選定している火災危険地区や木造住宅の密集地等を想定する。

（３）　地震災害【資料編*3*4*5　参照】

想定地震に関しては、県が実施した「地震に関する防災アセスメント調査報告書（平成24年３月)」に基づき、震源及び地震被害を想定する。

これから、想定地震モデルは福岡県西方沖地震の震源より南東部の、福岡市（博多湾）から筑紫野市付近にかけて、断層の長さ 27km（震源断層の長さ 27km)、震源断層の幅 15km（上端の深さ 2km、下端の深さ 17 km）とする、警固断層南東部地震（地震の規模マグニチュード7.2のケース）とする。

---

*3 ● 資料1.5.3「想定地震（震源)」
*4 ● 資料1.5.4「想定震度分布図（警固断層南東部)」
*5 ● 資料1.5.5「被害想定結果」

1)　筑紫野市における想定震源

警固断層南東部（北西下部）M7.2 （福岡県の中枢である福岡市等に影響を及ぼすケース）

2)　市の想定震度

本市における警固断層南東部地震（北西下部）M7.2 における想定される震度は市域は震度６強～5 強で、山間部の一部で震度５弱と想定される。

想定地震	震源	最弱震度	最強震度
警固断層南東部	M7.2	4	６強

3)　筑紫野市における人的・施設等被害

本市における地震被害想定は各項目別に次の被害が想定される。

被害想定項目		警固断層南東部地震 M 7.2
1	死者数	105
2	負傷者数	1,616
3	要救出現場（箇所）数	601
4	要救出者数	678
5	要後方医療搬出者数	162
6	避難者数	3,897
7	斜面崩壊危険度(A)箇所数	5
8	斜面崩壊被災建物棟数	22
9	建物全壊棟数 （木造全壊棟数） （非木造全壊棟数）	1,503 (1,287) (216)
10	建物半壊棟数 （木造半壊棟数） （非木造半壊棟数）	1,200 (864) (336)
11	地震火災全出火棟数	9
12	地震火災焼失棟数	0
13	上水道管被害箇所数	209
14	下水道管被害箇所数	72
15	都市ガス管被害箇所数	37
16	電柱被害本数	18
17	電話柱被害本数	17
18	生活支障世帯数 居住の制約 食料・飲料水 電気 情報通信回線（NTT）	 39,842 40,176 8,276 534
19	エレベータ閉じ込め者数	639

※発生破壊開始を北西下部とする。

以上の災害を想定し、震災対策編の災害予防及び災害応急対策への基礎とする。